

長野県高校女子サッカーの活性化について

－ 普及・強化のとりくみ －

長野県赤穂高等学校

金 子 純 也

1. はじめに

2012年のFIFAワールドカップ優勝に続き、なでしこジャパンはロンドンオリンピックでも銀メダルを獲得。その躍進ぶりは日本女子サッカーの実力を世界に知らしめた。

女子サッカーは新たなスポーツとして人気を博しており、高校では2012年（平成24年）にインターハイ種目として女子サッカーが正式種目として採用された。それを受けて全日本高等学校女子サッカー選手権大会は夏から冬へ移行。男子の全日本高校サッカー選手権大会と並びサッカーの冬の風物詩として脚光を浴びている。

2012年の北信越かがやき総体ではサッカー競技（男子・女子）が長野県松本市や大町市を中心に行われた。私は当時、大町北高校女子サッカー部を立ち上げて4年目を迎えていた。この年の長野県大会は6チームが出場し、優勝した大町北高校は開催県枠でインターハイに出場した。

私が女子サッカーを発足した2009年にはサッカー協会に登録しているチームは諏訪二葉高校1チームのみであった。それから3年後、まさにインターハイをきっかけに長野県高校女子サッカーは急速に発展を遂げたことになる。その後2016年に登録チーム数は10チームになり、現在も普及活動が広がっている。

長野県はインターハイというチャンスをきっかけに各校がクラブを立ち上げたが、そこには普及と強化という明確なテーマのもとに各チームの努力があった。クラブ活性化とは、一人の指導者、一人の生徒の挑戦（思いや行動）から始まっているのではないだろうか？

2. 研究の目的と調査方法

長野県では女子生徒の体力低下やクラブ運動部加入率が低く、運動離れが課題となっている。そこで今回の調査研究委員会では女子競技に注目し、現在発展途上である女子サッカーの活動状況を紹介しながら、女子競技の特性や今後の課題を調査することにした。

さらに、男子サッカー、女子バレーボールにも調査を依頼し、男女の違いや他競技との比較を行った。

調査方法は全県の女子サッカー部、男子サッカー部、女子バレーボール部各チームに同じ内容のアンケート調査を行った。各チームの顧問とキャプテンに質問に記述式で答えてもらい、チーム作りの方法や課題、各種目がどのように活性化を図っているかを比較分析した。

3. 長野県高校女子サッカーの活動

(1) 高校女子サッカーの始まり

①諏訪二葉高校・・・2006年にサッカー協会女子委員長の坂巻富子さんが同校でサッカー教室を行ったのが始まり。当時同校1年生の女子生徒2人がサッカーに興味をもち、坂巻さんが監督を務めるFC茅野ビエント（現FCアビエス）に入部したが、小学生から始めた子とは実力差があり、試合に出すこともできずに坂巻さんは悩んでいた。指導者が集まるサッカーカンファレンスで当時諏訪二葉高校男子サッカー部顧問の金井先生と出会い、この話をすると実は女子生徒2人は金井さん担任を務めるクラスの生徒であった。金井先生は2人とともにサッカー教室を企画すると20人の女子生徒が集まった。坂巻さんが講師を務め月1回ほど女子サッカー教室が行われた。生徒と金井先生は同好会を立ち上げチームが発足した。2007年には外部コーチの松本さんの指導の下、県内初の高校女子チームが誕生した。カンファレンスでカテゴリーの違う2人の指導者が交流し、生まれた奇跡であった。2009 大町北高校募集ポスター

大町北高校女子サッカー部員募集

平成21年6月17日

大町北高校サッカー部では、平成21年度より女子部員を募集します。

サッカーが大好きなあなた、新しいことに挑戦しようとしているあなた、サッカーを始めたませんか？初心者大歓迎です！！未来のなでしこJAPANは君だ！！

☆よくある質問☆

Q. ー 初心者でも大丈夫ですか？ ー

A. やる気さえあれば、初心者でもどんどん上達します。スタートはみんな一緒。そして長野県の高校女子サッカーも始まったばかり、これからの歴史を作るのはあなたです。

Q. ー 大会に出場できますか？ ー

A. 今年度は高校生の8人制リーグ戦に参加しています。メンバーが増えてチーム登録を行えば、高校の大会やその他の県大会、フットサルの交流会などに参加できます。

Q. ー 女子サッカー部を立ち上げるのですか？ ー

A. 今年度は「大町北高校サッカー部」に男子、女子部員を同時に募集します。基本的に男女が一緒に練習をしますが、別メニューで活動することもあります。（遠征や練習試合、大町市のクラブチームとの練習試合など）

Q. ー 現在女子部員はいくらいますか？ ー

A. 現在2年生2人、1年生3人の5人で毎日活動しています。新入部員も増えますよ！！

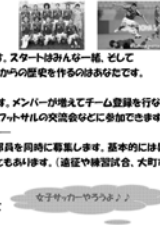
日頃から大町北高校の教育活動にご理解いただき感謝申し上げます。

昨年はアテネオリンピックでなでしこジャパンが素晴らしい活躍を見せ、日本の女子サッカーは今後発展していくでしょう。

高校女子サッカーは平成24年からインターハイの種目として新設され、長野県の大町市が会場になる予定です。北高サッカー部ではこのインターハイを目標に女子チームを発足します。地域に根付いたチームを作り、更には長野県の高校女子サッカーの育成に貢献したいと考えております。応援宜しくお願いします。

興味のある方はご連絡ください。

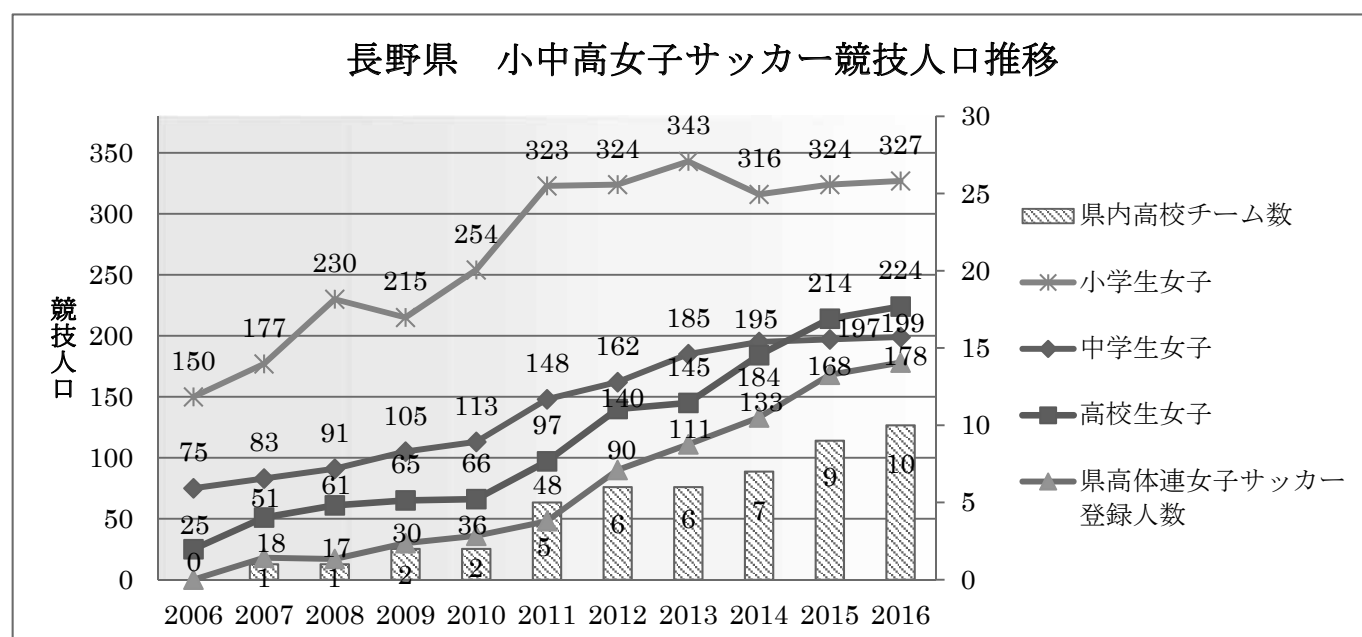
大町北高校 0261-22-0149 大町北高校サッカー部顧問 金子 純也



大町北高校（現 大町岳陽高校）・・・2008年に当時サッカー部顧問だった私が女子部員を募集したのが始まり。同年12月、男子サッカー部は3人、合同チームを組んで新人戦に出場していた。地元には女子チームがあり、受け皿になって連携できる可能性があった。目標は募集当時から長野県で開催予定であるインターハイ出場であり、ポスターやチラシに書いて配った。2009年の春には5人の1年生が入部した。女子サッカー同好会ではなくサッカー部女子として活動し、男子の横でトレーニングを行った。2010年にチーム登録して県内2校目が誕生した。その後も他のクラブに助人を借りながらリーグ戦や大会に出場し部員が11人を超えたのは4年後のインターハイ予選前であった。ゼロからの挑戦は恐れるものが何もなく、様々な人と出会いながら活動の場を広げていった日々は新鮮そのものであった。

現、10チームの発足のきっかけは二葉のように生徒が同好会を作ったケースが5チーム、大町北のように男子部に女子が入部したケースが3チーム、学校からの指示で発足したケースが2チームである。

(2)《グラフ①》 県内高校チーム数、女子サッカー各種登録人数（サッカー協会・高体連）



2012年のインターハイには高体連女子サッカー登録選手は48名→90名（1.8倍）になりその後増加は加速した。チーム数もインターハイ前年から増加を続けている。2015年は2チーム増えて高校年代と中学年代の登録数が逆転した。

2011年のなでしこジャパンワールドカップ優勝は全カテゴリーの増加に影響していると考えられる特に小学生は254名→323名（1.27倍）に競技人口が増えている。

4. 長野県女子サッカー活性化の取り組み

(1) リーグ戦による普及

① 高校女子8人制サッカー交流リーグ（2007～2009）5月～9月に4節（長野県サッカー協会主催）

ルール：JFAサッカールール、15分ハーフ、延長3分PK、ハーフコート、少年用ゴール使用。

高校女子なら誰でも自由に参加できる。毎回優勝チームに賞が贈られる。

② 5人制サッカー交流リーグ（2009）12月～3月に4節（協会主催）

ルール：JFAフットサルルールとコート、5号球使用、10分ハーフ、冬季の屋内サッカー

③ 高校大学女子サッカーリーグ（2010～2014）（協会主催）



2013 県総体決勝

長野県サッカー協会女子委員会組織に「高校大学連絡協議会」を設立し、U-18 以下の普及とインターハイへの強化を目的にサッカー教室や、イベント、リーグ戦の運営を行った。大学 2 校と高校 4 校で構成女子サッカーの普及に努めた。イベントは信州大学のチームが企画し運動会や交流会が行われた。

④ **高校女子ウィンターリーグ**（2015～2016） 1 月～3 月の冬季間に実施 （高体連主催）

県リーグ（一般）が行われない冬季の強化試合として女子サッカーの顧問が独自に計画して行われている。

⑤ **長野県女子サッカーリーグ（一般）**（2008～2016） （協会主催）

県内の一般女子サッカーリーグ、中学生以上が出場可能。現在は高校チームの参入により活性化し 1 部リーグ 6 チーム、2 部リーグ 7 チームの 13 チーム（内高校 6 チーム）でリーグ戦を行っている。3 年が引退するとリーグ後半に選手数が少なくなるため、年間通して試合ができるチームが参戦している。

(2) 高校女子サッカーの大会

① **全国高校総体**（4 回・2012 年～）

2012 年に行われた北信越かがやき総体より正式種目として採用された。18 チーム出場。

インターハイに伴い県内初の高校総体長野県大会が行われた。東海大三高校（現東海大諏訪高校）ら 4 校が協会登録し、県高体連に 6 チームが登録しトーナメント戦が行われた。決勝戦は延長戦の末、大町北高校（現大町岳陽高校）が 2-1 諏訪二葉高校に勝利し、インターハイの開催県枠を獲得した。準優勝の諏訪二葉高校は北信越大会に出場した。8 月のインターハイでは大町市と松本市を中心に男女サッカー競技が行われ、開会式では大町北高校キャプテンの山下が選手宣誓を務めた。兵庫県の日ノ本学園高校と対戦し 14-0 で圧倒され、全国の力を知る。日ノ本学園高校は高校総体初優勝となった。

② **秋季高校女子サッカー北信越大会**（10 回・2006 年～）

2010 年 10 月 県内初の「第 5 回 秋季高校女子サッカー長野県大会」が行われる。

この大会は北信越ブロック高校女子代表者会議により企画され、普及と強化を目的に行われている北信越地域ブロックの新人戦である。

③ **全日本高校女子サッカー選手権大会**（25 回・1992 年～）

高校女子サッカー最高峰の大会、32 チームが出場。長野県では 2012 年に大町北高校が初出場した。その後長野県がチーム登録数を伸ばし、北信越ブロックは 2 チームから 3 チームに全国出場枠を増やした。2015 年には松商学園高校が 2 回目の出場で香川県津田高校を破り、初の 1 回戦突破を果たした。

(3) 女子サッカーの特徴

女子サッカーチームは中学生、高校生、大学生、一般のそれぞれのカテゴリでのチーム数が少なく、混在してお互いを支え合っている。（県一般リーグでは全カテゴリの選手が混在するチームがほとんどである）男子では不可能と考えられるが、女子選手は中学生からこのような環境で競技を続けて自分が大人になったら下の世代を育てていく、いわば家族のような関係がなり立っている。（例、U-16 チームに大学生や大人が入り、監督が GK をしながら激をとばしている）これは女子サッカー独自の文化と言える。

一方、小学生から中学生に上りサッカーをやめてほかのスポーツ（部活動）を始める子が多く、また中学生以上の女子がサッカーを始めるケースも少ない。高校では半分以上が初心者であり、幼少期の次に女子サッカーを始めるきっかけとなっていると考えられる。

女子サッカー選手は幼少からハングリーな環境で育ち自分で意思決定してサッカーを続けている。そのため芯が強く個性的なキャラクターを持ち、思いやりがあり仲間を大事にする。女子サッカーファミリー（キッズからトップまで全カテゴリを示す）というキーワードが存在し、ファミリーの競技人口拡大を目指している。

5. 女子サッカーの可能性（学校・行政・地域の協力による地域活性化）

(1) 高校女子サッカー被災地支援交流会 in 大町の取り組み

2011年3月11日、東日本大震災では多くに人が被災し、避難したためにチームが解散してしまうクラブや、放射能により外で思い切りサッカーができない子供など深刻な問題に直面していた。

長野県大町市ではいち早く被災した子供たちを支援しようとサッカーの交流会を企画した。大町市は昭和53年のやまびこ国体でサッカー競技の会場となり、サッカーが盛んな街である。女子サッカーのクラブチーム（FC大町タフィタ）も存在し、キッズ、ジュニア、U-15、一般（高校生～大人）と活動が行われている。

大町北高校女子サッカー部が発足したこと、翌年には大町市がインターハイの男女サッカー会場になること、そしてなでしこジャパンがドイツワールドカップで優勝するなど女子サッカーが話題になっていた当時、福島の高校女子チームを招待して天然芝のピッチで思い切りサッカーをしてもらおうとこの企画が発案された。

大町市の教育委員会やサッカー協会などの行政、地元クラブチーム、そして高校チームにより実行委員会が立ち上がり、誰も行ったことのない初のプロジェクトが行われた。

2011年の11月18～20日に行われた「高校女子サッカー被災地支援 in 大町～目指せ！未来のなでしこジャパン～」は福島県立富岡高校と福島県高校生選抜チーム（あさか開成高校、二本松少女隊）の29名を招待。



2011年 第1回復興支援交流会 参加者全員で記念撮影



2011年 交流戦 大町北 v s 富岡 (11番)

富岡高校女子サッカー部は県外から選手が集まる強豪校であり長野県出身の選手も当時2名いた。被災したのちに実家に帰省し、チームはバラバラになっていた。福島の高校生たちに喜んでもらえるか不安があったが、スポーツの力、そして高校女子サッカーの力を信じて準備が行われた。県内4チームとFC大町タフィタの7チーム119名の選手が参加し、初日には大宮アルディージャとなでしこGKコーチの前田さんによるサッカー教室、そして2日間にわたる交流戦が行われた。富岡高校は技術、戦術、体格など長野県よりはるかに勝っており、レベルの違い、意識の高さを肌で感じる事ができた。そして何よりサッカーができることは当たり前ではないこと、福島では大変な思いをしていることを知ることができた。

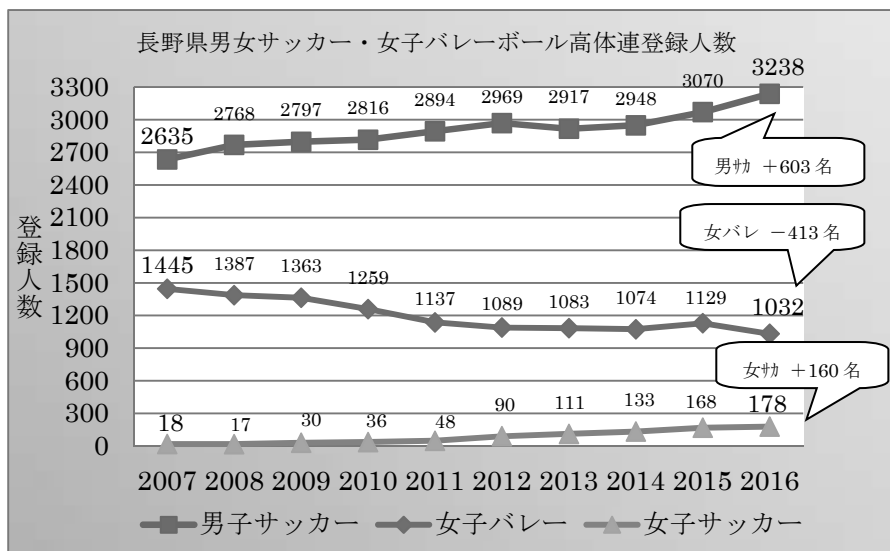
閉会セレモニーでは復興へのメッセージを書いたゲームシャツや色紙、手作りクッキーをプレゼントし交流を深めた。選手たちに笑顔があふれた。女子サッカー選手たちは明るくすぐに打ち解けることができる、そしてハングリーな環境にいるためか前向きでチャレンジ精神であふれているので背中を押してあげやすい。選手たちも指導者もサッカーで心が一つになれることを実感したことでしょう。

このプロジェクトは翌年に小学生を招待し、その後2013年から再び高校女子サッカーを招待して現在は「川渕三郎杯 おおまびょんカップ女子サッカー大会～東北復興支援～」と名称を改めて毎年8月に行われている。今年度は福島県よりあさか開成高校、盤城桜ヶ丘高校の2チームをはじめ、宮城県など県内外の16チームが参加し、交流を深めている。この先も大会を続けて後世に伝え、震災を風化させないでほしいと願う。

女子サッカーは交流の場を作り、サッカーをする、見る、支えることで自他が一つになれる魅力がある。

6. データから見る長野県高校女子サッカーの特徴 (男子サッカー・女子バレーボールとの比較)

(1) 男女サッカー・女子バレーボール高体連登録人数 (2007 年～2016 年)



《グラフ②》 9年で女子サッカーは競技人口が増えているが二葉、松商、東海で85人いるためその他のチーム平均は13.2人となり新人戦に11人満たないチームが存在する。

女子バレーボールは413名減少しチーム課題として「部員不足」を17校(40%)が挙げている。

男子サッカーは603名増加したが部員50名以上のチームが14、11名未満のチームが5チーム存在し課題となっている。

(2) 各種目 クラブ活性化の工夫・特徴

① 男女サッカー活性化 男子サッカー顧問の28%が活性化の理由としてリーグ戦を挙げている。U-18リーグは2007年からスタートし、現在はU-18高円宮杯北信越プリンスリーグと県リーグ1部～4部まで整備され100チームが参加している。(県登録数より参加チームが多い理由は、セカンド・サードチームが20チームとクラブ4チームが参加しているため)年間で8～14試合の試合を行い実戦の経験を多く積むことができる。上位を目指すだけでなくリーグの結果が高校総体や選手権大会組み合わせに反映されるため、リーグ戦はとても重要な位置づけとなっている。その一方、年間試合数が多いため過密スケジュールになり休日にじっくり練習ができないことやリーグに参加できないチームが練習試合を組みにくいなどの弊害も起きている。

女子サッカーも前述のとおりリーグ戦により県全体で普及活動が続け、協会加盟前のチームの活動をサポートしてきた。今後も普及と強化が2大命題であり、同好会やクラブチームのなど高校年代の女子選手が多様な形で参加できるリーグ戦を開催し、新たな加盟校の発足をアシストできるシステムは必要になるだろう。

② 女子バレーボール活性化 女子バレーボールの活性化は顧問アンケートで中学校との交流が14%、ローカル大会・研修大会、合同合宿・練習会などが12%で上位を占めている。長野県では各地域で協会と中学高校の顧問が協力し中学3年生が引退したのちに中学選抜チームを作る。高校ネットの高さとボールで練習を行い高校チームと交流している。中学3年生と高校の橋渡しとなる重要な活動である。

ローカル大会等は県内各地で年間13の大会や強化練習が行われている。ローカル大会は試合期ではない3月や8月に行われることが多く、中には32チームが参加し、県外の高校を10チーム以上招待して交流を図る大規模な大会も行われている。しかしこのような活動は各地域の指導者や協会が独自に行っているため、横のつながりはなく他地区の成果や課題を共有することは難しい。

近年始まった研修大会は1月～2月に行われ、指導者と生徒の審判や運営の向上を図っている。県大会に出場しないチームが参加し、総体までの活動意欲を持続させる機会を作っている。

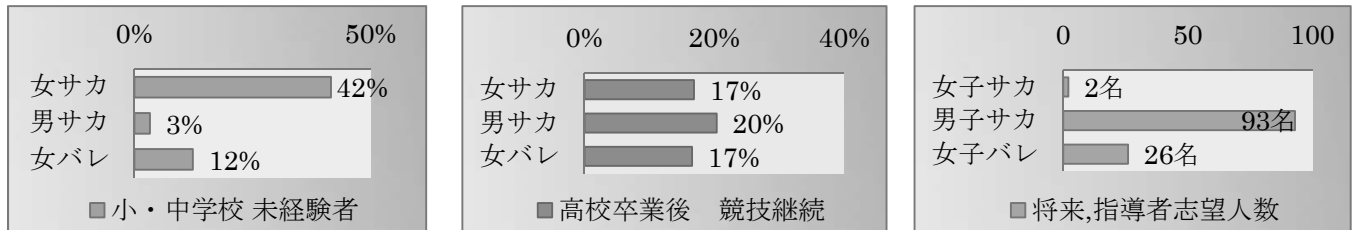
③ 考察 各種共通しているのは、試合機会を増やすことと、県内外の交流、中学との交流である。

(3) アンケート調査

全県にアンケートを依頼したところ女子サッカー全チーム、男子サッカー・女子バレーボールの約半数のチームから回答を得ることができた。集団のデータに加え顧問とキャプテンにそれぞれ7項目の質問を回答してもらい、各種目の活性化の取り組み、今後の課題、男女の指導の違いなどを分析した。

	高体連 加盟チーム数	ア ン ケ ー ト 回収	部員数（アンケー ト協力校）	小・中学校 未経験者	高校卒業後 競技継続	将来, 指導者 志望人数
女子サッカー	10	10	178	74	30	2
男子サッカー	79	40	1583	52	322	93
女子バレー	79	43	526	65	87	26

《グラフ③》 未経験者の割合・卒業後に競技継続を希望する割合・指導者希望人数



《グラフ④》女子サッカー・バレー顧問 男子指導経験調査、男子サッカー顧問 女子指導 意識調査



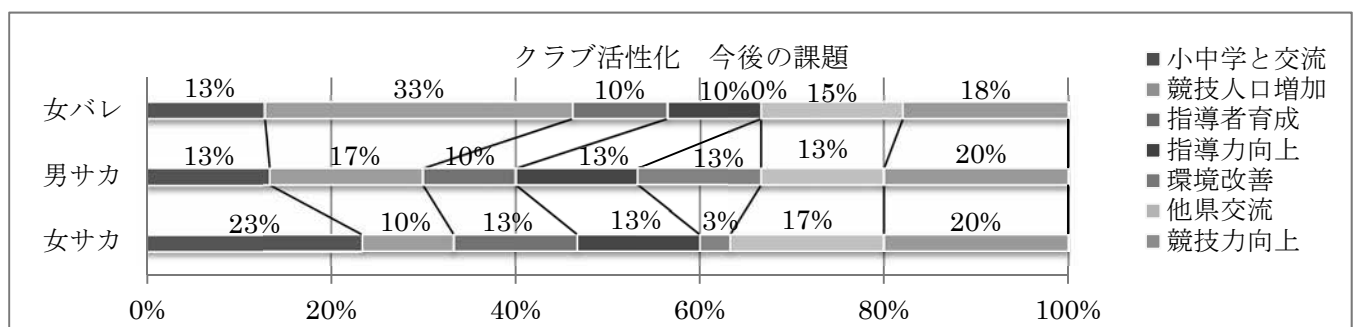
(4) 男女の指導の違いについて

各顧問の指導歴を調査すると男子指導経験持つ女子部顧問は女子サッカー93%、バレー63%であり男女顧問間の交流が行われている。対して男子サッカー部顧問の意識調査では女子指導の希望は22%で消極的である。理由としては「女子指導は難しそう」などの苦手意識や、女子の活動に関わりがないため選択肢にないのが現状である。男女指導の違いについては女サカ、女バレ顧問に質問した。様々な回答の中で女性顧問の意見を参考にまとめた。

- ① 女子指導は女性を理解することが必要。生理の際の体調不良や気分の盛り下がり、「無理をする」ことは女性の本能が受け付けないこと。女性は現実主義であるため理想を投げかけても腑に落ちない。
- ② 仲間やコーチ（顧問）からの「共感」がモチベーションにつながる、「勝利」を目標に掲げるよりも目の前の目標達成から進める方が楽しいと感じ、伸びて行く。チームの輪を大事にしている＝公平性を求める。

《グラフ⑤》 各種目クラブ活性化 今後の課題

3 種目のクラブ活性化における課題を以下の 5 項目に整理し割合を比較してみる。



7. まとめ

女子サッカーが今後さらに競技人口・チーム数を増やすには、小中学校との交流による普及と指導者の育成と男女顧問の交流、選手の競技力向上が挙げられる。また他競技、他のカテゴリーとの共存を図ることを忘れてはならない。10年で飛躍的に発展した女子サッカー、さらに10年後にむけての挑戦が始まっている。

